

ビルマ語の受動表現に関する覚え書き

岡野 賢二

1. ビルマ語の受動表現

ビルマ語¹には態 (voice) としての受動表現はないが、受動の意味を表す構文は存在する。基本的に以下の二つの構文である。cfは対応する能動文である。

- (0) a. $N_2(=kâ)$ $N_1(=yê)$?ã-V $k^hàn=yâ-$ 「 N_2 が N_1 にVされる」
 $N_2(=主)$ $N_1(=属)$ 名詞化-V 受ける=不可避
- b. $N_2(=kâ)$ $N_1(=yê)$?ã-V- $k^hàn$ $t^hî-$ 「 N_2 が N_1 にVされる」
 $N_2(=主)$ $N_1(=属)$ 名詞化-V-受ける 当たる
- cf. $N_1(=kâ)$ $N_2=kò$ V- 「 N_1 が N_2 をVする」
 $N_1(=主)$ $N_2=対$

いずれも受動の内容を表す句は名詞化接頭辞 ?ã-と動詞とが結合した ?ã-V型名詞(?ã-V名詞) となっていることがビルマ語の受動表現の特徴と言えよう。aでは ?ã-V名詞が他動詞 $k^hàn-$ 「受ける」の補語となっている。これに対しbは ?ã-V名詞にさらに他動詞 $k^hàn-$ 「受ける」が後接して結合していて、名詞 ?ã-V- $k^hàn$ が他動詞 $t^hî-$ 「当たる」の補語になっている。以下、前者のタイプをA形式、後者をB形式と呼ぶ。

A形式では $k^hàn-$ 「受ける」の後に〈不可避〉を表す助動詞 $yâ$ が現れる。 $k^hàn-$ 「受ける」は意志動詞であり、助動詞 $yâ$ が現れない (?ã-V $k^hàn-$) と「甘んじて (行為を) 受ける」という意味になる。つまり助動詞 $yâ$ は $k^hàn-$ 「受ける」の主語によるコントロール可能性を無効にしていると言える。

B形式の場合、主動詞 $t^hî-$ 「当たる」は複合動詞 $t^hî.k^hài?$ 「傷つける」を構成する要素であり、この意味をイメージさせる、と複数のインフォーマントが報告している²。このイメージはB形式の分布に関係すると思われる。 $t^hî-$ 自体は通常、モノを主語とし、

¹ 本稿の音声表記は以下の通り：頭子音 (阻害音) p-, p^h-, b-, t-, t^h-, d-, t̄-(d-); s-, s^h-, z-, c-, c^h-, j-, k-, k^h-, g- (共鳴音) m-, hm-; n-, hn-; ɲ-, hɲ-, ɳ-, hɳ-; l-, hl-; y-, ʃ-, w, hw- (その他) h-, ʔ-, f-, r- : 母音 (単母音) -i, -e, -ɛ, -a, -ɔ, -o, -u (二重母音) -ai, -au, -ei, -ou (軽声) -ǎ : 末子音-ʔ, -N : 声調 (低平調) -à (高平調) -á (下降調) -â。頭子音の規則的有声化については下線で示した。

² $t^hî.k^hài?$ 「傷つく、損なう; 傷つける」の項構造はよく分らない。主語が被動者で目的語が被害の対象である場合と、主語が動作主で、目的語が被動者である場合とがある。

モノが到達する対象を目的語とする他動詞である。なお従来の記述・研究において B 形式の存在に触れたものは管見の限り一切ない。

動作主はいずれも現れないものがより自然と感じられるようだが、出現する場合は受動の内容を表す名詞に対する attribute として、属格助詞で標示されるか、もしくは斜格形³で現れる。

受動表現の主動詞 k^hàɴ-, t^hi-とも他動詞と見なすのは受動の内容を表す表現がいずれも V を名詞化したものであり、それを対格助詞 kò で標示することが可能であるからである。つまり A, B 形式のいずれもが V を名詞化した表現を目的語補語とする他動詞文だということである。よってこれらを態と見なすことは適切ではない。なお対格助詞 kò が生起すると、ほとんどの場合不自然な文となる。

受動の内容を表す複合名詞は A 形式に限り ?ǎ-V 以外に名詞節標識-tà による V-tà 型、名詞化接尾辞-ch^hín による V-ch^hín 型が観察される。V-ch^hín 型は一般にフォーマルなニュアンスを持ち、?ǎ-V 型とほとんど差のないことが多い。よって本稿では V-ch^hín 型を特に理由のない限り例示しない。また受動の内容を表す ?ǎ-V 名詞は接頭辞 ?ǎ-がしばしば脱落する。しかし脱落の環境については詳しいことは分っていない。

A 形式は比較的古く⁴から用いられている形式であるのに対し、B 形式は近年使われるようになってきた新しい形式である。B 形式は A 形式に比べ、受動の主体に対する憐憫や同情、嘲笑といったニュアンスを伴うようだ。B 形式はいわば俗語的であり、口語体でしか用いられない。

2. 先行研究

ビルマ語の受動表現に関する先行記述・研究は、そのみを扱ったものとしてはエイティンライン (1995, 1997?(未見)) ぐらいであろう^{5,6}。その他にはそのような構文

³ 人物を指示する名詞で、最終音節が低平調であるものは、それが下降調化することにより斜格形式となる。高平調は下降調化は随意的である。人物指示名詞以外には斜格形がない。

⁴ 19 世紀末以降、イギリスによる植民地統治下で英語の影響をビルマ人は強く受けるようになった。英語の受動態を表す (翻訳する) ために A 形式が積極的に用いられたのではないかと推測されるが、歴史的変遷など詳細は今のところ不明。

⁵ エイティンライン (1995) に示された例文の文法的確性に疑義があり、また助動詞-yá (不可避) を同形の動詞 yá-「得る」と同一視したような分析を行っていることから、今回その内容には触れない。なお (1997) は未見だが、同氏の同じテーマについての修士論文である。

⁶ 大阪大学外国語学部の倉部氏がビルマ語の受動文についての卒業論文を今年度執筆したと聞いているが、やはりこの詳細も分らない。 ※追記参照。

があることは示しているが、積極的に扱っていない⁷。しかし被害(受身)の意味をより積極的に表すため、上記 A, B 形式が以前に比べて多用されるようになってきていることも恐らく間違いない。

3. 用例の観察

本号に掲載されている「受動表現」アンケートにビルマ語の回答例も挙げられているので、本稿ではその他のインフォーマント⁸の作例をできるだけ取り上げる⁹。

3.1 直接受身

直接受身はビルマ語の受動表現の中で最も「言いやすい」タイプであろう。

- (1) a. kòsò = hà (kò?ê =)?ä-yai? k^hàN(= lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 (KA_主)名詞化-殴る 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは(コーエーに)殴られた。(<KS は・(KA の)殴り(を)・受けざるを得ない)
- b. kòsò = hà (kò?é) yai?-tà k^hàN(= lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 (KA) 殴る-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (同上) (<KS は・(KA が)殴るの(を)・受けざるを得ない)
- c. kòsò = hà (kò?é = yê) yai?-tà k^hàN(= lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 (KA=属) 殴る-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (同上) (<KS は・(KA の)殴るの(を)・受けざるを得ない)
- (2) kòsò = hà (kò?é = yê) (?ä-)yai?-k^hàN t^hî = t̃è
 KS=話題 (KA=属) (名詞化-)殴る-受ける 当たる=v.s
 (同上) (<KS は・(KA の)殴られ(を)・当たる)¹⁰
- (3) kòsò = k̄ò (kò?é(= k̄â)) yai?(= lai?) = t̃è
 KS=対 (KA(=主)) 殴る(=適時)=v.s
 コーソーを(コーエーが)殴った。

A 形式 ((1)各文) にせよ B 形式 (例文(2)) にせよ、受身文では一般に動作者を表さ

⁷ Wheatley (1987:124) は目的語が主語よりも前に現れる文に英語の受動態の訳を与えている。

⁸ 今回の調査には主として本学特任外国人教員の Dr. Tun Aung Kyaw にご協力いただいた。

⁹ 人名としてコーソー-kòsò (KS, 男性名), コーエー-kò?é (KA, 男性名), フラフラ hlâhlâ (HL, 女性名), ミャミャ myâmyâ (MY, 女性名) 等を用いている。

¹⁰ 「殴られ(を)当たる」というのは日本語として不自然だが、本稿では B 形式に対して仮にこのような分析をしておく。また例文の如何に関わらず日本語は非過去形にしてある。

ないのが最も自然である。なお今回のインフォーマントは主語となる被動者を話題標識 hà でマークしているが、無標もしくは主格助詞=ká で標示される場合もある。例文(3)は被動者が文頭に現れる能動の他動詞文である。

?a-V 名詞が比較的短いとき、動作者は斜格形で現れることが多い ((1)a 文)。受動の内容が名詞節の場合、動作主は名詞節の主語項として無標で現れる ((1)b 文) のが普通と考えられるが、属格標示された文 ((1)c 文) も十分に容認可能である点が注目される。

B 形式の場合も動作主が属格項として現れ得るが、その場合かなり不自然であるという。能動の他動詞文 (例文(3)) は対象の項 (=被動者) が文頭に現れることで一種の主題化が起こっているものと考えられる。

A 形式も B 形式も動作主が明示されると自然さが落ちる傾向がある。これはビルマ語の受動表現において事実上動作主項が必須ではないこと、動作主項に情報上の焦点とならない (なりにくい)¹¹ という、多くの言語の受動表現に共通すると思われる性質を持っていることになる。殊に動作主が固有名の場合は「言いにくさ」が増すようである。固有名というのは情動的に非常に際だっているもので、受動表現の動作主項には一般になじみにくいということであろう。逆に個別の人物を指示する名詞として働く親族名称や職業名は動作主項として現れても不自然さはあまりない。

- (4) a. kòsò=hà ?äp^hè-?ä-yai? k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 父_斜-名詞化-殴る 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは父親に殴られた。
- b. kòsò=hà s^häyâ-?ä-yai? k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 先生_斜-名詞化-殴る 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは先生に殴られた。

これは親族名称や職業名が情動的な際だちが少ないためだとも言えようが、同時に「目上の者が目下の者を殴る」といった状況が (二者間の社会的関係が見えにくい固有名よりも) 想起しやすいためといった理由もあると考えられる。

動物が主語であるような場合についても見ておく。A 形式は可能であるが、B 形式はほぼ容認されない。

¹¹ ビルマ語は斜格形の名詞、属格標示された名詞に対して、焦点を標示するための手段を持たない。

- (5) a. kòsò=hà cá-(?ǎ-)kai?/k^hwé-(?ǎ-)kai? k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 虎-(名詞化-)噛む/犬-(名詞化-)噛む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは虎/犬に噛まれた。(＜KSは・虎/犬噛み(を)・受けざるを得ない)
- b. ?* kòsò=hà cá-(?ǎ-)kai?-k^hàn/k^hwé-(?ǎ-)kai?-k^hàn t^hî=tè
 KS=話題 虎-(名詞化-)噛む-受ける/犬-(名詞化-)噛む-受ける 当たる=v.s
 (＜KSは・虎/犬噛まれ(を)・当たる)

B形式が容認されない理由としては、B形式が動作者項を取りにくいこと、B形式の持つ「嘲笑」のニュアンスと相容れないことなどが考えられる。個人的な意見を述べると、今のところ証拠となる現象はないものの、動作者が被動者に対して被害を与える意図を動作者が持っているとは見なされるためではないかと考えている。

3.2 持ち主の受身、身体部位

持ち主（身体部位）の受身も直接受身と同様に A, B 両形式で表現可能である。

- (6) a. kòsò=hà c^hidau?-(?ǎ-)nín k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 足-(名詞化-)踏む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは足を踏まれた。(＜KSは・足踏み(を)・受けざるを得ない)
- b. ?? kòsò=hà hlâhlâ=yê c^hidau?-?ǎ-nín k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 HL=属 足-名詞化-踏む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーはフラフラに足を踏まれた。
 (＜KSは・HL(の)・足踏み(を)・受けざるを得ない)

(6)b 文はかなり容認度が低い。インフォーマントは「理解可能だが、実際には言わない」と回答した。一つの理由としては前項で述べたように、そもそも動作者項は現れにくいということがあるが、(6)b 文の場合は別の理由もかも知れない。すなわち、“hlâhlâ(=yê) c^hidau?-?ǎ-nín”「フラフラ(の)足踏み」の部分か³、“hlâhlâ(=yê) ?ǎ-nín”「フラフラ(の)踏み」ではなく“hlâhlâ(=yê) c^hidau?”「フラフラ(の)足」の解釈が優先される恐れである。

ただし ?ǎ-V 名詞型ではなく、名詞節型の場合は“hlâhlâ=yê”「フラフラの」が“c^hidau?”「足」を限定する（誤った）解釈を引き起こさないようである。

- (7) a. kòsò=hà c^hidau? nín-tà k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 足 踏む-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは足を踏まれた。(＜KSは・足を踏む(の)・受けざるを得ない)

- b. kòsò=hà hlâhlâ c^hidau? nín-tà k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 HL 足 踏む-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s

コーソーはフラフラに足を踏まれた。

(<KSは・HLが・足を踏むの(を)・受けざるを得ない)

- c. kòsò=hà hlâhlâ=yê c^hidau? nín-tà k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 HL=属 足 踏む-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s

(同上)

(<KSは・HLの・足を踏むの(を)・受けざるを得ない)

例文(6)b が不自然で、例文(7)c が不自然でない理由、言い換えると前者が誤ったパーシングを引き起こしやすく、後者がそうではない理由は今のところ不明である。なおこれらの対応する能動文は次のようになる。

- (8) kòsò=yê c^hidau?(=kò) (hlâhlâ(=kâ)) nín(=lai?)=tè
 KS=属 足(=対) (HL(=主)) 踏む(=適時)=v.s

コーソーの足を(フラフラが)踏んだ。

いわゆるよく確立された複合述語 (NV 型動詞) の場合、?ã-V 名詞の名詞化接頭辞 ?ã-が脱落して、前にある名詞と複合を起こす。その場合でも動作者が属格標示された場合に解釈に混乱が起こる。

- (9) a. kòsò=hà pá-yai? k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 頬-殴る 受ける(=適時)=不可避=v.s

コーソーは頬を打たれた。

(<KSは・頬打ち(を)・受けざるを得ない)

- b. ? kòsò=hà hlâhlâ=yê pá-yai? k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 HL=属 頬-殴る 受ける(=適時)=不可避=v.s

(同上)

(<KSは・HL(の)・頬打ち(を)・受けざるを得ない)

- c. kòsò=hà hlâhlâ pá-yai?=tà k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 HL 頬-殴る=名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s

(同上)

(<KSは・HL(が)・頬打つ(の)・受けざるを得ない)

- d. kòsò=hà hlâhlâ=yê pá-yai?=tà k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 KS=話題 HL=属 頬-殴る=名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s

(同上)

(<KSは・HL(の)・頬打つ(の)・受けざるを得ない)

B 形式の場合、身体部位を対象とする行為の受身であっても、動作者は現れにくい。

- (10) a. kòsò=hà c^hidau?(?ã-)nín-k^hàn t^hî=tè
 KS=話題 足-(名詞化-)踏む-受ける 当たる=v.s

コーソーは足を踏まれた。

(<KSは・足踏まれ(を)・当たる)

- b. ?? kòsò = hà hlâhlâ = yê c^hidau?-(?ã-)nín-k^hàn t^hî = t̃è
 KS=話題 HL=属 足-(名詞化-)踏む-受ける 当たる=v.s
 コーソーはフラフラに足を踏まれた。(＜KSは・HLの・足踏まれ(を)・当たる)
- (11) a. kòsò = hà pá-yai?-k^hàn t^hî = t̃è
 KS=話題 頬-殴る-受ける 当たる=v.s
 コーソーは頬を打たれた。(＜KSは・頬打たれ(を)・当たる)
- b. ? kòsò = hà hlâhlâ = yê pá-yai?-k^hàn t^hî = t̃è
 KS=話題 HL=属 頬-殴る-受ける 当たる=v.s
 コーソーはフラフラに頬を打たれた。(＜KSは・HLの・頬打たれ(を)・当たる)

3.3 持ち主の受身, 持ち物

持ち主(持ち物)の受身も身体部位と同様に A, B 両形式で表現可能である。

- (12) a. kòsò = hà pai?s^hàn?ei? ?ã-k^hó k^hàn(=lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 財布 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは財布を盗まれた。(＜KSは・財布盗み(を)・受けざるを得ない)
- b. ? kòsò = hà kò?é = yê pai?s^hàn?ei? ?ã-k^hó k^hàn(=lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 KA=属 財布 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは財布を盗まれた。(＜KSは・KAの・財布盗み(を)・受けざるを得ない)
- (13) a. kòsò = hà (kò?é) pai?s^hàn?ei? k^hó-tà k^hàn(=lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 (KA) 財布 盗む-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは(コーエーに)財布を盗まれた。
 (＜KSは・(KA(が)・)財布(を)・盗むの(を)・受けざるを得ない)
- b. kòsò = hà kò?é = yê pai?s^hàn?ei? k^hó-tà k^hàn(=lai?) = yâ = t̃è
 KS=話題 KA=属 財布 盗む-名詞節 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーはコーエーに財布を盗まれた。
 (＜KSは・KS(の)・財布(を)・盗むの(を)・受けざるを得ない)

A 形式の ?ã-V 型の受動文では, 動作者が現れる ((12)b 文) とやはり不自然である。名詞節型(例文(13))では名詞節(補文)の主語項として現れても, 名詞節全体を限定する属格標示された項として現れても, どちらも容認可能である。

受動構文でない他動詞文を以下に示す。

- (14) kòsò = yê pai?s^hàn?ei?(=kò) kò?é(=kâ) k^hó(=lai?) = t̃è
 KS=属 財布(=対) KA(=主) 盗む(=適時)=v.s

コーソ-の財布を(コーエ-が)盗んだ。

身体部位の場合と同様、B形式の受動文で動作者が現れるのは不自然である。

- (15) a. kòsò=hà pai?s^hàN?ei? ?ǎ-k^hó-k^hàN t^hí=tè
KS=話題 財布 名詞化-盗む-受ける 当たる=v.s

コーソ-は(コーエ-に)財布を盗まれた。(＜KSは・財布・盗まれ(を)・当たる)

- b. ? kòsò=hà kò?é=yê pai?s^hàN?ei? ?ǎ-k^hó-k^hàN t^hí=tè
KS=話題 KA=属 財布 名詞化-盗む-受ける 当たる=v.s

コーソ-はコーエ-に財布を盗まれた。

(＜KSは・KAの・財布・盗まれ(を)・当たる)

ビルマ語の受動構文「盗まれた」で動作者が現れにくいのは、一般常識的に誰が持っていったか分からないから「盗まれた」という(被害の意味を持つ)言語表現が選択される、ということがもう一つの理由としてあると考えられる。これは「盗まれる」よりも動作者不明であることが強く期待される「掏られる」の場合、日常的な状況において動作者を表す項はほとんど生起できないと言ってよい。

- (16) cǎnò ba?sǎkǎ-pò=hmà pai?s^hàN?ei? gǎbai?-hnaí? k^hàN=k^hê=yâ=tè
1 バス-上=於 財布 ポケット-取り出す 受ける=過去時=不可避=v.s

私はバスで財布を掏られた。

例文(16)は動作者が現れる余地がない。普通「掏られた」場合は掏った人物が被害者には不明である。これに対して動作者でも「泥棒」のように実質的に指示対象が分らない場合は出現できる。

- (17) cǎnò tǎk^hó-(?ǎ-)k^hó k^hàN=k^hê=yâ=tè
1 泥棒-(名詞化-)盗む 受ける=過去時=不可避=v.s

私は盗難にあった。(＜私(が)・泥棒盗み(を)・受けざるを得ない)

3.4 自動詞からの間接受身

A形式、B形式とも用いることはできない。「泣かれた」「死なれた」等は全て自動詞をそのまま用いる。

- (18) mǎnêpâ=kǎ k^hǎlé nò=lò nénélé=hmâ ?ei?=lò mǎ-yâ=p^hú
昨夜=過去時 子供 泣く=理由 少し=さえ 寝る=接続 否-得る=v.s

昨日の夜、子供が泣いたので、少しも寝られなかった。

ただし次のような「死なれた」に近い例がある。逐語的には「(生命損失の)損害を被った」の意味である。日本語では「息子の命を奪われた」に近いであろうか。

- (19) ?ădò = hà ?édi = tai?pwé = cāun tû = tá = yê ?ăte? ?ă-fóun k^hàn = yâ = ṭè
 叔母=話題 その=戦闘=原因 3_疑=息子=属 生命 名詞化-失う 受ける=不可避=v.s
 叔母はその戦闘で息子を失った。
 (＜伯母は・その戦闘ゆえ・彼女の息子の・生命損失(を)・受けざるを得ない)

3.5 モノ主語受身, 一回的

やはり A 形式, B 形式とも用いることはできない。ただし被害の意味で受動構文を用いた次のような表現が可能である。

- (20) a. (?ă-)s^hau? k^hàn(=lai?) = yâ = ṭè
 (名詞化-)建てる 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (建物を) 建てられた。
 b. (?ă-)s^hau?-k^hàn t^hî(=lai?) = ṭè
 (名詞化-)建てる-受ける 当たる(=適時)=v.s
 (同上)

上記の文はいずれも「自分の土地に勝手に建物を建てられた」というような場合、被害の意味で用いられる。

3.6 モノ主語受身, 恒常的; 動作主が問題にならない場合

A 形式, B 形式とも用いることはできない。「カナダではフランス語が話されている」というような場合は次のように表現する。

- (21) kănédá = hmà pyìnti?-zǎgá ṭóun = ṭè
 カナダ=於 フランス-言葉 使う=v.s
 カナダではフランス語を用いる。

3.7 モノ主語受身, モノ主語の背後に被影響者が想定される場合

「財布が盗まれた」はビルマ語ではモノ主語受身の文として表現することはできないようだ。3.3 のように主語となり得るのはモノの持ち主のみである。

- (22) a. cǎndò pai?s^hàn?ei? ?ă-k^hó k^hàn(=lai?) = yâ = ṭè
 1m 財布 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 私は財布を盗まれた。 (＜私は・財布盗み(を)・受けざるを得ない)

- b. () pai?s^hàn?ei? ?ǎ-k^hó k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 財布 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 財布を盗まれた。 (＜財布盗み(を)・受けざるを得ない)

上記例文(22)で b 文は a 文から主語 “cǎnò” 「私」が脱落しただけであるように見える。しかし主語が明示されないことで結果的に動作の対象物 “pai?s^hàn?ei?” 「財布」が主題化されていると考えられる。次の文を見られたい。

- (23) a. pai?s^hàn?ei? mǎnégā ?ǎ-k^hó k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 財布 昨日 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 財布を昨日盗まれた。 (＜財布・昨日・盗み(を)・受けざるを得ない)
- b. ?? cǎnò pai?s^hàn?ei? mǎnégā ?ǎ-k^hó k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 1m 私 財布 昨日 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 私は財布を昨日盗まれた。 (＜私・財布・昨日・盗み(を)・受けざるを得ない)
- c. cǎnò-pai?s^hàn?ei? mǎnégā ?ǎ-k^hó k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 1m 私-財布 昨日 名詞化-盗む 受ける(=適時)=不可避=v.s
 私の財布を昨日盗まれた。 (＜私の財布・昨日・盗み(を)・受けざるを得ない)

上記(23)の各文は “pai?s^hàn?ei?” 「財布」は ?ǎ-V 名詞の直前にない。この時, “cǎnò” 「私」が主語として現れる (b 文) とよって非常に不自然で, 容認しづらい文となる。c 文のように “pai?s^hàn?ei?” 「財布」の attribute として斜格形 “cǎnò” となるのが自然である。例文(22)a では斜格ではなく無標であることから, “pai?s^hàn?ei?” 「財布」は ?ǎ-V 名詞の直前にない場合には, 文全体の主題と解釈されるのであろう。(23)b 文では主題の句が二つになるために非常に不自然な文になるのかも知れない。

3.8 モノ主語受身, 結果状態の叙述

A 形式, B 形式とも用いることはできない。ただし, やはり被害を表す場合のみ (下記例文 c) 用いることができるようだ。

- (24) a. *? nànyàn(=pò)=hmà bǎjìkǎ ?ǎ-c^hei? k^hàn(=lai?)=yâ=tè
 壁(=上)=於 絵 名詞化-引っかける 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (壁に絵を掛けられてしまった。)
 (＜壁(の上)に・絵(が)・掛ける(のを)・受けざるを得ない)
- b. * nànyàn(=pò)=hmà bǎjìkǎ ?ǎ-c^hei?-k^hàn t^hĩ=tè
 壁(=上)=於 絵 名詞化-引っかける-受ける 当たる=v.s
 (＜壁(の上)に・絵(が)・掛けられる(のを)・当たる)

- (25) nànyàn(=pò) = hmà bǎjìkǎ c^hei? = tètè
 壁(=上)=於 絵 引っかける=v.s
 壁に絵を掛けた。

ただし例文(24)a は「(権力者などが) 有無を言わず、絵を掛けていった」の意味でなら可能である。

3.9 感情述語の受身

A 形式, B 形式とも用いることはできない。¹²

- (26) a. *? hlâhlâ = hà kòsò = yê ?ǎ-c^hi? k^hàn = (= lai?) = yâ = tètè
 HL=話題 KS(=主) 名詞化-愛する 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (フラフラはコーソーに愛されている.)
 (<HL は・KS の・愛し(を)・受けざるを得ない)
- b. * hlâhlâ = hà kòsò = yê ?ǎ-c^hi?-k^hàn t^hi (= lai?) = tètè
 HL=話題 KS(=主) 名詞化-愛する-受ける 当たる(=適時)=v.s
 (フラフラはに愛されている.) (<HL は・KS の・愛され(を)・当たる)
- (27) hlâhlâ = kò kòsò (= kâ) c^hi? = tètè
 HL=対 KS(=主) 愛する=v.s
 フラフラを/はコーソーが愛している。

しかし次の(28)のようなケースのみ, A 形式が使える。これは愛すること/愛されることの弊害(例えば「親の過保護ゆえ, 子供が一人では何もしない/できない人間になってしまった」など)についての表現である。

- (28) a. ?ǎyán ?ǎ-c^hi? k^hàn = yâ = tètè = lé mǎ-káun = p^hú
 やたら 名詞化-愛する 受ける=不可避=名詞節=類似 否-良い=v.s
 やたらと愛されるのも良くはない。
 (<やたら・愛し(を)・受けざるを得ないことも・よくない)
- b. ?ǎyán ?ǎ-c^hi?-k^hàn t^hi = tètè = lé mǎ-káun = p^hú
 やたら 名詞化-愛する-受ける 当たる=名詞節=類似 否-良い=v.s
 (同上) (<やたら・愛され(を)・当たることも・よくない)

¹² 今回調査を行わなかったが, “móun”「憎む」は受動表現になると思われる。

3.10 伝達動詞の受身

A 形式, B 形式とも自然な文は引き出せなかった. 他動詞の能動形 (下記 c 文) を用いるのが普通である.

- (29) a. * myâmyâ = hà “you?-s^hó = ṭè” = lô lhâlhâ-ʔă-pyó k^hàn (= lai?) = yâ = ṭè
 MM=対 姿-悪い=v.s=引用 HL-名詞化-言う 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (ミヤミヤは『不器量だ』とフラフラに言われた)
 (<MM は・「不器量だ」と・HL(の)言い(を)・受けざるを得ない)
- b. * myâmyâ = hà “you?-s^hó = ṭè” = lô lhâlhâ-ʔă-pyó-k^hàn ṭ^hî = ṭè
 MM=対 姿-悪い=v.s=引用 HL-名詞化-言う-受ける 当たる=v.s
 (<MM は・「不器量だ」と・HL(の)言われ(を)・当たる)
- c. myâmyâ = ḳò “you?-s^hó = ṭè” = lô lhâlhâ = ḳâ pyó = ṭè
 MM=対 姿-悪い=v.s=引用 HL=主 言う=v.s
 ミヤミヤに『不器量だ』とフラフラが言った.

次の表現は「酷いことを言われた」「悪口を言われた」等の被害の意味に特化した表現として A 形式, B 形式が用いられている. 対応する能動文 (下記 c) は被害の意味に固定されるわけではない.

- (30) a. myâmyâ = hà ṭòḍò ʔă-pyó k^hàn (= lai?) = yâ = ṭè
 MM=話題 かなり 名詞化-言う 受ける(=適時)=不可避=v.s
 ミヤミヤはかなり (ひどいことを) 言われた.
 (<MM は・かなり・言い(を)・受けざるを得ない)
- b. myâmyâ = hà ṭòḍò (ʔă-)pyó-k^hàn ṭ^hî = ṭè
 MM=話題 かなり (名詞化-)言う-受ける 当たる=v.s
 (同上) (<MM は・かなり・言われ(を)・当たる)
- c. myâmyâ = ḳò ṭòḍò pyó = ṭè
 MM=対 かなり 言う=v.s
 ミヤミヤにかなり言った.

3.11 具格名詞がある場合

具格名詞 (具格助詞-nêで標示された名詞) もしくはそれに類する名詞が現れる場合について例を挙げておく. 具格名詞は受動構文においてほぼ ʔă-V 名詞と複合を起こすが, 具格のまま現れてもよい. その場合の意味が若干異なる.

- (31) a. * kòsò = kò gέ pyi?/pau? = tèt
 KS=対 石 投げる/穴が開く=v.s
 b. kòsò = kò gέ = nê pyi?/pau? = tèt
 KS=対 石=具 投げる/穴が開く=v.s
 コーソーに石を投げた。
- (32) a. kòsò = hà gέ-(?ǎ-)pyi?/gέ-(?ǎ-)pau? k^hàn(= lai?) = yâ = tèt
 KS=話題 石-(名詞化-)投げる/石-(名詞化-)穴が開く 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーは投石を受けた。¹³ (<KSは・石投げ(を)・受けざるを得ない)
 b. kòsò = hà gέ-(?ǎ-)pyi?/gέ-(?ǎ-)pau?-k^hàn t^hî = tèt
 KS=話題 石-(名詞化-)投げる-受ける/石-(名詞化-)穴が開く-受ける 当たる=v.s
 (同上) (<KSは・石投げられ(を)・当たる)
- (33) a. kòsò = hà gέ = nê ?ǎ-pyi?/?ǎ-pau? k^hàn(= lai?) = yâ = tèt
 KS=話題 石=具 名詞化-投げる/名詞化-穴が開く 受ける(=適時)=不可避=v.s
 (同上) (<KSは・石で・投げ(を)・受けざるを得ない)
 b. kòsò = hà gέ = nê ?ǎ-pyi?-k^hàn /?ǎ-pau?-k^hàn t^hî = tèt
 KS=話題 石=具 名詞化-投げる-受ける/名詞化-穴が開く-受ける 当たる=v.s
 (同上) (<KSは・石で・投げられ(を)・当たる)

例文(33)は「石で攻撃した」の意味である。具格助詞-nêの有無が意味の違いのはっきり現れるのは次の例である。

- (34) a. kòsò = kò ká(= kâ) (wìn-)tai? = tèt
 KS=対 クルマ(=主) (入る-)ぶつかる=v.s
 コーソーを車が轢いた。
 b. kòsò = kò ká = nê (wìn-)tai? = tèt
 KS=対 クルマ=具 (入る-)ぶつかる=v.s
 コーソーを車で轢いた。
- (35) a. kòsò = hà ká-(?ǎ-)tai? k^hàn(= lai?) = yâ = tèt
 KS=話題 クルマ-(名詞化-)ぶつかる 受ける(=適時)=不可避=v.s
 コーソーはクルマに轢かれた/交通事故に遭った。
 (<KSは・クルマぶつかり(を)・受けざるを得ない)

¹³ 例文(32)は「皆から非難された」の意味かも知れない。

b. kòsò=hà ká=nê ʔǎ-taiʔ kʰàN(=laiʔ)=yâ=tè
 KS=話題 クルマ=具 名詞化-ぶつかる 受ける(=適時)=不可避=v.s

コーソーはクルマで轢かれた。[意図的]

(<KS は・クルマで・ぶつかり(を)・受けざるを得ない)

(36) a. kòsò=hà ká-(ʔǎ-)taiʔ-kʰàN tʰi=tè
 KS=話題 クルマ-(名詞化-)ぶつかる-受ける 当たる=v.s

コーソーはクルマに轢かれた/交通事故に遭った。

(<KS は・クルマぶつかられ(を)・当たる)

b. kòsò=hà ká=nê ʔǎ-taiʔ-kʰàN tʰi=tè
 KS=話題 クルマ=具 名詞化-ぶつかる-受ける 当たる=v.s

コーソーはクルマで轢かれた。[意図的]

(<KS は・クルマで・ぶつかられ(を)・当たる)

道具と解釈される名詞の場合, ʔǎ-V 名詞と結合すると, 全体として一つの事態を表していると思なされるのに対し, 具格標示されると「それを使って攻撃する」というような動作者による意図的な行為による被害表現となる。

3. 12 等位節での主語の振る舞い

等位節構造において, 受動構文を用いて先行する節と後接する節との主語の交替を抑制する現象 (e.g. 「A さんは B さんに呼ばれて, 今 B さんの部屋に行っています」) はビルマ語にはあまり見られない。

(37) kòsò=hà hláhlá kʰó=lô ʔǎgú tû=ʔǎkʰán(=kò) tʰwá-nè=tè
 KS=話題 HL=対 呼ぶ=理由 今 3 部屋=向 行く=いる=v.s

コーソーは, フラフラが呼んだので, いま彼女の部屋に行っている。

4. 被害の意味を持たない受動表現

一般に受動表現は被害のニュアンスを持つ場合に用いられるが, cʰícu- 「褒める」, tìnhmyauʔ- 「推挙する」, ywécʰè- 「選出する」, (sʰú) ʔaʔhnín- 「賞を与える」のようないくつかの名誉, 栄誉のニュアンスを持つ事態の場合, A 形式の受動構文が使われる。動作の内容は ʔǎ-V 名詞よりフォーマルである V-cʰín 名詞が好まれるようだ。なお B 形式は用いることができない。

- (38) a. kòsò = hà ʔouʔkät^há = ʔäp^hyiʔ ywéc^hè(-c^hîN) k^hàN = k^hé = yâ = tè
 KS=話題 議長=～として 選択する(-名詞化) 受ける=過去=不可避=v.s
 コーソーは議長に選出された。
 (<KS は・議長として・選択(を)・受けざるを得ない)
- b. * kòsò = hà ʔouʔkät^há = ʔäp^hyiʔ ywéc^hè-k^hàN t^hî = tè
 KS=話題 議長=～として 選択する-受ける 当たる=v.s
 (<KS は・議長として・選択され(を)・当たる)

5. まとめと課題

ビルマ語の受動表現の研究・調査が困難であるのは、第一にバリエーションが非常に多いことが挙げられる。本稿では簡単に A 形式, B 形式としたが、その中で名詞化接辞の脱落や格標示の有無など細かなバリエーションがあるのだが、こういった条件でこのようなバリエーションが生じるのか全く分っておらず、包括的な構文記述には至っていない。このような構文そのものについての調査記述が必要であるばかりでなく、受動表現が出現する文脈的な条件も今のところはっきりしていない。被害の意味が大いに関係していることは間違いないが、そうではない場合もある。このあたりの条件を知るためには大規模なコーパスによる用例収集や、様々な文脈的前提を設定した上で、受動表現を選択するかどうかといったインフォーマント調査を行う必要がある。

また受動表現が歴史的にどのように発生してきたのかという点も興味深い。A 形式の通時的な研究も必要であろうし、A 形式がありながら、被害専用の B 形式が生じてきた言語内的、言語外的要因についても考えなければならない。

参考文献

- エイティンライン.1995.「ビルマ口語における NP2 NP1 a-V/V-ta khan yá de.構文について」神戸大学 (公開されていないと思われるが、詳細は不明).
- Wheatley, Julian K. 1987. “Burmese”, *The Major Languages of East and South-East Asia*, edited by Bernard Comrie, pp.106-126, Routledge, London.

追記

本稿執筆後に倉部慶太氏の「ビルマ語の受動表現 KHAN YA 構文の記述、分類と意味」（2009年、大阪大学・卒業論文）を読む機会を得た。この論文は出動名詞（本稿では「? ã -V 名詞」）を補語とする KHAN YA 構文（本稿の「A 形式」）の受動表現に関する包括的な記述研究である。倉部氏の分析は A 形式の構文的、意味的特徴、? ã -V 名詞として A 形式の補語になり得る動詞の形態的、意味的な分類、? ã -V 名詞の ? ã -脱落条件、ビルマ語の受動表現と日本語、英語との形態統語的、意味機能的対照など多岐に渡っており、本稿で未解決とした問題の一部はこの論文で既に明らかにされている。併せてご参照いただきたい。